

り、使と稱して招き來れり、その人來らざる時は、又他に適て、略相識る者といへども招き來る、かくて雜賓惡客といへども、必これを邀ふ、僮者大むね道すがら主翁の相識に遇しきことのあれば、苦に誘ひて鶴樓に至らしめ、主翁をして喜しむ、晩年これが爲に稍貧しけれども、鶴樓他の好みなく、戸室破損すれどこれを修することなく、身にはたゞ一卉服あるのみ、出行せんことをおもへば即出、縕袍たりともいさ、かも恥る色なし、されども諸客に饗する飲食の費に至りては、家人日々に得るところの價をもて、ことごとくこれを供して足らしむ、しかも他を問はず、かくて十年あまり一日の如くにて衰すといへり、略下

〔雲室隨筆〕根本雄助といへる人は、常陸の産といへり、久敷林家の書生にて有しが、篤學の人にて歴史に委し、且國朝の學に委しく、律令格式より國史まで、悉く推極られたり、然ども其生質名利を厭ふ人にて、諸侯より召せども不應、松平左京亮殿より被聞及度々召けれども、斷りて不應、林百助殿地面に住けり、予雲室僧久敷交れり、八代巢河岸に入塾せし中より、常に戸を閉て人に逢ず、五六月盛夏の時といへども、戸閉て居けり、予が敝院も數々被訪、常に往來せり、

雜載

〔枕草子三〕にくきもの

いそぐことあるおりに、長ごとするまらうど、あなづらはしき人ならば、のちになどいひても、おひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人いとにくし、略中

こゝろゆくもの

つれづれなるおりに、いとあまりむつまじくは、あらず、うとくもあらぬまらうどのきて、世の中の物がたり、此ごろある事のおかしきも、にくきも、あやしきも、これにかゝりかれにかゝり、おほやけわたくしおぼつかなからず、よきほどにかたりたる、いと心ゆくこゝちす、